

詩篇91篇 「まことの引きこもり」

はじめに:90 篇とのつながり

1A 全能者という隠れ場 1-2

2A 狩人の罟、破滅的な疫病 3-9

1B 制御できない力 3-4

2B 昼と夜の恐怖 5-6

3B 近づかない危険 7-9

4A 御使いの働き 10-13

1B 守られる道 10-12

2B 敵を踏みつける足 13

5A 愛し合う主と私 14-16

本文

詩篇第 91 篇を開いてください。私たちは、ヨハネの福音書の聖書通読の学びをしていますが、一度、今日は、特別に 91 篇を眺めてみたいと思います。説教の題名を、ちょっと驚くかもしれませんが、「まことの引きこもり」としました。日本において、長いこと「引きこもり」の問題が起こっています。仕事や学校に行かないで、家族の人以外の人とはほとんど交流を持たない、6 か月以上、自宅に引きこもっている状態を指しています。その大きな理由は、「これ以上、自分が傷つられたくない」あるいは「他人を傷つけない」、つまり他人に迷惑をかけたくない、と思っています。¹

ところが今、新型コロナウイルスの対策のため、世界全体が国ごと引きこもっているという状態が発生しています。まず中国の武漢から、3 日に一度、家族の一人だけが食べ物の調達以外は外出してはならない、となりました。中国のあらゆる都市でそれが義務付けられ、今や、世界のいろいろな国の政府が国民に対して義務付けています。それだけではありません。大きな集会は開いてはいけないということになり、個人レベルでの活動のみが許されている国々が増えています。そして入国拒否を国々が互いに行っている状態です。世界全体が、国レベルで、社会レベルで、個人レベルで、「引きこもりなさい」と呼びかけているようなものです。

もちろん、隔離という考え、防疫の考えを否定するものではありません。聖書にも、らい病人(ツアラアト)を七日間隔離して、その症状を調べるように祭司に命じている箇所がレビ記 13 章に書いてあります。そして霊的に「汚れ」というのが他の人々に移るので、離れなければいけないという教えがあります。

¹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BC%95%E3%81%8D%E3%81%93%E3%82%82%E3%82%8A>

しかし、他の人々から離れること、引きこもることによって、どうなるのでしょうか？今、とてつもない経済危機が世界で起こると考えられています。コロナが終息したら、ほっとするではなく、気づいたらコロナが流行する前の世界と変わってしまった世界に置かれていることに、気づくかもしれません。それは経済というのは、「つながり」によって生きているからです。物と物のつながり、人と人のつながり、情報と情報のつながりがあって、それでちょうど水道管をずっとつなげていって水が流れてくるのと同じで、お金が動いて、その流れそのものが経済を活性化させます。感染症の流行を阻むことによって、その動きを止めてしまっているからです。

これは神の造られた世界だからです。神は、それぞれつながりをもって造っておられます。神ご自身がご自分を語られる時に、人を造られた時に、「われわれの似姿に造ろう。」と言われて、「われわれ」と言われたのです。神は唯一でありながら、複数として語られた。三位一体の神として語られたのです。そして、キリストにあって、バラバラにされている者たちを一つにすることが御心としてしています。「ヨハ 17:22-23 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」キリストにあって、バラバラになってそれぞれが心の壁を作っている中で、その隔ての壁を壊してくださいました。そして、平和を造りだし、一つにしてくださいました。キリストがその肉体において、罪からくる罰を引き受けてくださいましたので、キリストが私たちの平和となり、私たちを一つとしてくださいました。

そして、その一つとされた私たちにおいて、被造物全体も一つにされます。「エペ 1:9-10…その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。」すべて造られたものが、キリストが再び来られる時に一つに集められ、それで神の国が立てられます。そこに命があります。

命とは結びつきから生まれています。三位一体の神の中にある結びつきに命があり、その神と交わる私たちに命があります。使徒ヨハネが言いました。「 Iヨハ 1:2-3 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」ですから、新型コロナウイルスとの戦いは霊的なものです。人々を互いに引き離し、引きこもらせる力を持っています。国々を引き離し、鎖国するかのごとく引き離す力を持っています。命を救うつもりが、経済不況で自殺するなど、命を取る危険さえあります。そして、キリスト者が教会として集まることを自粛し、その結びつきにある命と力を失わせる力が働いています。

はじめに:90 篇とのつながり

しかし、それであっても、私たちは実際の問題があります。いつものように行動することはできません。絶えず、それぞれが距離を取る努力が求められます。この時に、しかし私たちは霊的に、引きこまれる場所があるのを覚えましょう、今日はこれがテーマです。自分の家に引きこもるのではなく、主なる神ご自身の中に引きこもるのです。91 篇、そして 90 篇にも、興味深い言葉があります。「90:1 主よ、世々にわたって、あなたは私たちの住まいです。」主ご自身を住まいと断言しています。そう、人が最もしなければいけないのは、主ご自身のところに逃げてきて、この方を自分の住まいと断言することです。

ところで 91 篇は、90 篇の続きとも言われています。モーセが書きました。90 篇は、主が自分たちの住まいであり、自分のいのちがいかに保たれるかを教えています。荒野で四十年間、さまよわなければならず、その間に人々が死んでいきます。その過酷な現実を見て、モーセは、人は本来、永遠に生きるはずだったのに、寿命が 70 年、80 年とされている中に、罪からくる神の御怒りを感じています。それゆえ、その限られた人生の日々をきちんと数えることができるよう、知恵の心を得させてくださいと祈っています。

そうです、私たちには命が与えられ、それは限られたものです。神がその終わりの時を定めておられます。私たちは、その限られた日々の中で、いかに御心を行っていくことができるのか？このことを思っていなければいけません。癌の宣告を受け、余命が告げられたら、次に何をするか優先順位を決めて、それを行っていくことに努めます。私たちは、残された日々の中で、いかに神を喜ばせ、人々に善を行っていくのかを考えるのです。「I ペテ 1:17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごさない。」

そして 91 篇に入ります。主は私たちのいのちをいつ取り去るのか決めておられますが、その定められた日まで、必ず守ってくださるという約束であります。91 篇では、荒野の旅において古い世代がすべて死に絶えて、新しい世代の人たちに主が再び旅に出るように命じ、それで旅を始めたことを背景としています。その中で、自分たちではどうにもならなかったのは、略奪する者たちが襲ってくる。また疫病です。この二つは、どんなに注意しても、自分たちでどうすることもできない、解決の方法は完全な形では見つからないというものです。

1A 全能者という隠れ場 1-2

1 いと高さ方の隠れ場に住む者、その人は全能者の陰に宿る。2 私は【主】に申し上げよう。「私の避け所、私の砦、私が信頼する私の神」と。

「いと高さ方」とは、「どんなに高いところにあるものであっても、それよりも高いところにおられる

方」です。すべての王であられる方です。私たちが、伝染病が世界に大流行となろうとも、主はその流行の上におられるということです。主が支配しておられるという事実です。その方のところに隠れて住みます。自分にとってどんなに問題が大きいのと思っても、その問題さえも神は支配しておられるという真理の中に憩うのです。

そして、「全能者」です。エル・シャダイとも言いますが、シャダイという言葉は母親の乳から派生しているものです。母親の胸に抱かれた赤ん坊のように、全く、完全に拠り頼むことのできる方ということです。すべてのことをお出来になる方で、この方を信じて守られるということでもあります。「陰」とありますが、それは日照りの強い暑い気候の中で岩となってくださり、自分はその陰で休むことができる、ということです。

そして2節で、その神が、自分の避け所、岩、信頼している私自身の神として、自分自身に関わってくださる方として受け入れています。つまりここから、私を守ってくださる方は、ただ主なる神のみだということを告白しているのです。

私たち人間は、とても矛盾した存在です。第一に、自分で自分を守るように教えられています。ですから、何か危険を感じたらそれを避けるように教えられています。ところが、第二に、数多くのことは、肝心のところは無意識のうちに深い信頼を寄せながら生きています。自分は自分で守るのだとしながら、実は思いっきり頼りにしているものが沢山あるのです。たった今、この建物が崩れ落ちるわけではないと深い信頼を持っているから、落ち着いていることができますね。もし、東京の各地で、何もしないのに、どんどん建物が倒れたら、たぶん、この建物は頑丈にできているかどうか？と安全確認をすることでしょう。お札はどうでしょうか？偽札をつかまされているかもしれませんね？世界では、大きな札、例えば一万円札を出したら、店員の人は一瞬懸命、本物かどうか確かめたりします。けれども、日本でそんなことしませんね。それは、自分の手持ちの現金は本物だからという安心があるからです。

ところが、その安心だと思っていたものが、そうではないと気付く時があります。実は、自分は無意識にいろいろなものに頼っていて、それは自分で何とかできるものではないことを分かっているはずなのに、自分で何とかしようと必死になるのです。意識の中では、自分でコントロール、制御できていると思っているからです。これがパニックと言います。しかし、ここで思いを変えないといけません。自分はそもそも、全くゆだねられた存在だったのだと。自分自身の命が今、ここで守られているのは、全能者、エル・シャダイであられる主がおられるからなのだということです。このことを思い巡らすのです。そして、自分にはどうにもできないことについて全能者である主が守ってくださると信じて、その中に憩うのです。いかに、自分が弱くされ、すべては主の御手の中にあるかを悟れるか？にかかっています。

2A 狩人の罠、破滅的な疫病 3-9

1B 制御できない力 3-4

3 主こそ、狩人の罠から、破滅をもたらす疫病から、あなたを救い出される。4 主はご自分の羽であなたをおおい、あなたはその翼の下に身を避ける。主の真実は大盾また砦。

イスラエルの民は、先ほど話しましたように、外敵が罠をしかけるようにして襲撃してくることがありました。また、疫病もはびこっていたようです。そして、これらは自分たちでどうしようもできない、制御できないものなのです。しかし、主はそういった自分にはどうしようもないことであっても、そこから救い出してくださると約束してくださっています。

疫病については、私たちはたった今、とても身近な存在であります。あたかも制御できるものであるかのように、人々は政府のしていることを責め立てますが、それは間違いです。どの国もうまくいっていません。神は私たち人類に、「天地を造ったわたしがいるのだ」と言うことを示しておられます。コロナウィルスの感染も、主がおられるのだということの証しなのです。

狩人の罠であります、これもまた制御できるものでないことを知るべきでしょう。罠をしかける人は、いつでもどこでもいて、これは完全に避けることができないということです。私たちが、何かを前進させようとするときに、必ずそれを引っ張ろうとする力が働きます。そして、工作をして貶めようとします。けれども、主が救い出してくださいます。

そして、主ご自身が親鳥で、私たちがその雛であり、親鳥が雛を翼で守るように守られていることを教えています。そこに身を避けるのです。覚えていますか、モアブ人ルツが姑ナオミについていってベツレヘムに住み、そこで落穂ひろいをしていた時、そこが親戚ボアズの畑でした。そこで、ボアズがルツをねぎらって、こう言いました。「2:12 【主】があなたのしたことに報いてくださるよう。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、【主】から、豊かな報いがあるように。」ここで、問わなければいけないことは、「私たちが雛のようになれるか？」ということです。自分がそこまで弱い存在か、ということ認められないから、自分が全てのことを守っていられると思っているから、それで翼の下に隠れるというような発想にならないのです。しかし、やはり弱い自分は存在するのです。

そして、「主の真実は大盾また砦。」とありますが、共同訳の聖書では「主のまことは、大盾、小盾」とあります。大盾は、身体全体を覆う大きなもので、小盾は、敵が目の前にいる時に、自分自身が動き回れるために使う盾です。いずれにしても、戦いがあっても、主のまこと、主の真実が、私たちが敵の槍から、敵の矢から守られるということであり、私たちが、今の危険を見ても、これまで主が真実な方であった、決して裏切ることはなかったということを思い出せば、それが私たちを守ってくれるのです。

2B 昼と夜の恐怖 5-6

5 あなたは恐れない。夜襲の恐怖も昼に飛び来る矢も。6 暗闇に忍び寄る疫病も真昼に荒らす滅びをも。

主が私たちが翼で覆い、大盾、小盾になっておられるので、夜と昼の危険があっても、私たちを守ってくれます。襲撃をしてくるのは、夜にも昼にも突如としてやってくるがあります。疫病も、夜にも昼にもやってきます。いつやってきても、おかしくないのです。

けれども、恐れが入るとどうなるか？という、四六時中、そのことを考えなければいけなくなります。昼にもその危険があるし、夜にもある。だから眠れなくなる、ということもあるでしょう。そこで、主の前に出てその心を砕いていただかないといけません。すべてを主に任せるのです。90 篇には、いのちが数えられていることが教えられていました。主がいのちについては、すべてを掌握されています。主が取られると決めた時は、取られるのです。主が全てを支配しておられるのですから、その中で生きるのです。私たちは、注意している必要はあります。けれども、恐れてはいけません。恐れるとは、自分でまだ掌握している、コントロールしていると思込んでいるからです。

3B 近づかない危険 7-9

7 千人があなたの傍らに、万人があなたの右に倒れても、それはあなたには近づかない。8 あなたはただそれを目にし、悪者への報いを見るだけである。9 それはわが避け所、【主】を、いと高き方をあなたが自分の住まいとしたからである。

ここで強調されているのは、「あなたには」というところです。つまり、あなたが個人的に神に愛され、選ばれ、守られているということがあり、だから他の大勢の人が倒れていたとしても、自分はそうならないということなのです。しかも、目の前でその倒れている様を見なければいけないほど接近したとしても、そうなりません。そのような守りの理由が、先にダビデが歌ったことの繰り返しですが、自分にとって主が、住まいとなっているかどうかにかかっています。主が願われているのは、この親しい交わり、個別にご自身に会って、話をしているかどうか？であります。引きこもって安全なのは、家の中ではないのです、主ご自身と時間を過ごすことです。この方があらゆる恐れがあっても、さらにその上におられる、いと高き方だ、ということです。

4A 御使いの働き 10-13

1B 守られる道 10-12

10 わざわいはあなたに降りかからず疫病もあなたの天幕に近づかない。11 主があなたのために御使いたちに命じてあなたのすべての道であなたを守られるからだ。12 彼らはその両手にあなたをのせあなたの足が石に打ち当たらないようにする。

自分の住んでいるところ、天幕に禍が降りかからないとのこと。天使が守ってくれるからとのこと。しかし、どうなのだろう？神を慕っている人だって、新型肺炎になることもあるのでは？と考えるでしょう。ここで思い出さないといけないのは、イエス様に対して悪魔が誘惑した時に使った言葉だったのです。イエス様を神殿の頂に立たせて、そこから落とそうとすると、御使いが守ってくれるから、とのことでした。イエス様はもちろん、それを拒まれました。

しかし、主のところには禍が降りかからなかったんです。主は、父なる神が定められた時に自らを十字架刑に処されるために明け渡しました。その時に、御使いがイエス様を助けていました。ゲッセマネで祈られた時に、「ルカ 22:43 すると、御使いが天から現れて、イエスを力づけた。」こうやって天使が助けてくれて、それから十字架につけられました。しかし、イエス様は父なる神が住まいとなっていました。ご自身が父の定めによって自らを十字架に引き渡しましたが、三日目に、甦らせてくださったのです。ですから、害を受けなかったのです。

キリスト者の考える禍からの守りは、いわゆる厄払いとは違います。キリストが神に従われ、十字架にまで忠実であったのに、三日目に甦らせてくださったところにある守りです。私たちも、自分に死に、キリストにあって生きる中で、必ずや守ってくださるのです。

2B 敵を踏みつける足 13

13 あなたは獅子とコブラを踏みつけ若獅子と蛇を踏みにじる。

これは、ただ救われるだけでなく、余裕をもって救われるということです。キリストについての預言が、創世記 3 章 15 節で、女の子孫が蛇の子孫の頭を砕くことが書いてありますが、そのようにして、サタンを自分の足で踏み砕くようになるとパウロは教えています(ローマ 16:20)。そして、ローマ 8 章では有名な言葉があります。「ロマ 8:37 しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」

ですから、私たちは被害者意識や自己憐憫に警戒しないといけません。たとえ危険があっても、いろいろな苦しみはあっても、その中にあっても、主が確実に事を運んでおられるのだという余裕が必要なのです。

5A 愛し合う主と私 14-16

14 「彼がわたしを愛しているからわたしは彼を助け出す。彼がわたしの名を知っているからわたしは彼を高く上げる。15 彼がわたしを呼び求めればわたしは彼に答える。わたしは苦しみのときに彼とともにいて彼を救い彼に誉れを与える。

すばらしいですね、主が彼を愛し、また彼が主を愛しています。こういう、人格的に知っている、

親密に知っている関係があって、祈りに応えて下さり、また苦しみの時も共にいられて、救いと誉れを与えられると言います。ですから、キリスト者の目標が良い人間になることでないことが一目瞭然でしょう。「神さまが大好きなんです。あなたなしには、私はやっていけません！」と、半ば甘えたような関係、深い愛情と信頼の関係にいることを神は願っておられるのです。

ダビデのことを思います。彼はさまざまな危険に会いました。サウルから命を狙われました。がむしゃらに主を求めました。彼が計算してしまったのは、ペリシテ人の敵陣に行った時です。確かにそれでサウルの手からは免れたでしょう。でも、アマレク人に襲われるという結果を招きました。計算は大切でもあります、しかし、がむしゃらに主に従い、主に呼び求めた状態の時こそが、救いが与えられたのです。

16 わたしは彼をとこしえのいのちで満ち足らせわたしの救いを彼に見せる。

これは、死んだ後の永遠の命、またとこしえの救いでもあります。ですから、最後まで主は自分に対して責任を持ってくれるということです。

ローマ時代の時、その疫病(おそらく天然痘)がローマに広まった時、みなが恐れて、患者から逃げていた時に、それでも看病したのがキリスト者でした。自分自身が感染して死んだこともありましたが、それでも死亡率は減り、また終息した後で人々が戻ってきたら、みながキリスト者になっていました。人は恐れに打ち勝つところに、愛の行為ができます。そしてその恐れへの勝利は、自分の命は全能者の手の中に隠されているということ、そして死後にまで責任を持ってくださること、復活させてくださることにまでつながります。